

ほな歴史通信

第11号

1999. 6. 1

大子地方の峠を歩く

大子地方は周りが山で囲まれているため、道路の開発が遅れ、昔は、他の地方へ出るには大小の山や丘を越えなければなりませんでした。そこが一般にいう峠であります。町には峠の名称をもつ地名は数多くあります。わたしが調べただけでも、約三十近くあります。これらの中には史跡や遺跡があり、歴史に現れた峠、伝説や民話のある峠、また、見晴らしがよく風景のよい峠、樹木におおわれて見晴らしのわるい峠、曲がりくねった急峻な峠、ゆるやかな峠等があります。これらの峠の名称の由来等について、大子地方の歴史に現れた峠を二・三紹介しましょう。歴史の上に現れてくる峠には月居峠、洞坂峠、境ノ明神峠等があります。

月居峠という地名は、月居山の呼称の由来から来ているようです。ツキオレ山は一年中月が南嶺に居すわっていて昇るからとか、佐竹の家臣野内大膳の城址があり、居城を月居殿、大膳を月居斎といったところから来ているという二説があります。

月居峠を道筋とする古道は、江戸時代は「東濱漁河の道」と呼ばれ（新編常陸国誌）、北茨城や那珂湊等から大子地方や馬

頭・野州（栃木）方面へ塩やかつおが運ばれる道でもありました。また、峠には天台宗月居山光明寺の山門や観音堂、天保五年徳川斉昭が巡村の折、この峠で休息し詠んだ歌碑等が建立されております。天狗党と諸生党の戦いの地でもあります。

洞坂峠は大沢村と大子村のほぼ境にあり、太郎山の西側を通り、難所と見晴らしのわるい峠で知られていました。大子地方と水戸を結ぶ道筋にあり、この道は南郷街道と呼ばれていました。この峠の地名の由来ですが、水府志料によりますと「或説に保内は洞内なりといへり。今保内に属する村々大方左右に高山有りて、村里洞（注…ホラ）の如し。」「大沢村への通路を土人とう坂と呼び、是亦洞坂ならんか。」とあり、洞坂という地名は、山深き「ホラ」の中の坂道から起こった地名ともいえるかも知れません。これとは別に、洞坂峠周辺一帯は、佐竹時代に塩沢金山や槐沢金山を中心に金の採掘が盛んに行われたところであるから、金の採掘に由来している地名ではないかとも考えられます。また、この峠は、天狗党が大子集結を目指して北上してきた時、諸生党が待ち受け激しい戦を展開した所でもあります。

境ノ明神峠は上金沢と馬頭町盛泉の県界にある峠です。この峠に境ノ明神の小祠が祀られています。新編常陸国誌に「古ハ陸奥ト下野ノ界ナリ」とあり、保内（大子）地方が陸奥の国に属していた頃、陸奥国と下野の境界を明確にするために境の明神を祀り、境界標識として小祠を建てたといわれています。

このように、峠には史実もあり、遺跡や伝承が残されています。わたしの古道と峠の探索は、まだ始まったばかりですが、そこで感じたことは、郷土には先人が残した保存したい古道や峠、峠にまつわる史跡や遺跡があるということです。古道や峠の探索は「歩いて学ぶ歴史」であると思っています。（小澤）

「学校音シリーズ2」

お式は十八事な学校行事

最近の学校の行事は、運動会・文化祭・遠足・修学旅行などのほかに、PTA行事や球技会、陸上競技大会、立志式、宿泊学習など様々な行事が多く、それだけに楽しみも多いと思う。昔の学校行事といえば、春秋の遠足、運動会、学芸会くらいなものだった。遠足は歩いて歩いて行ける所で、低学年では近くの山や川、高学年になると雲巖寺や八溝山などへ行った。学芸会は、今では余りやらないが、昔は三学期になると、どの学校でもかなり盛大にやったものである。

しかし、その頃一番大事な学校行事はお式（儀式）だった。四方拝、紀元節、天皇節、明治節が四大節と言って学校では必ず式を挙げた。「小学校儀式規定」で決まっていた、全国同一に行われた。四方拝は一月一日の新年を祝うお式。紀元節は国の始めを祝う、今の建国記念日に当る。天皇節は天皇誕生日。明治節は明治天皇の誕生を祝う式である。

お式の日には全校生を初め、青年学校の生徒、村の有志などが集まる。会場は、講堂や体育館などには無かったから、教室が三つくらい仕切りを外せるようになっていて、そこを使う。生徒は全部立ったままで整列し、先生や来賓は前の方に椅子に腰掛ける。正面には白い布を掛けたテーブルや、天皇皇后両陛下の写真（御真影と言った）の入った神棚のようなものが飾られている。式はまず「開式の辞」で始まる。教頭先生の仕事だ。

次いで「国歌斉唱」君が代を歌う。次に「御真影奉開」、校長先生が白い手袋のはめて恭しく壇上に上る。最敬礼をして御真影の入っている扉を開く。一同最敬礼。続いて「勅語奉読」。再び校長が壇上に上り、用意してあった勅語を読みあげる。

教育勅語だ。「朕思うに わが皇祖皇宗国を肇むること・・・」

終わるまで一同頭を垂れて聞く。それが終わると「学校長訓話」。続いて「来賓祝辞」、村の有志は村長さんとか学務委員などで、顔ぶれはいつも同じだ。この来賓挨拶が長くて子供たちは飽きてしまう。何しろ立ち通しなのだから。教頭先生が来賓一人一人の所へ行つて今やった挨拶に対して礼を述べ、次の人の前へ行つて「どうぞ一言ご挨拶を・・・」などと御願する。生徒はあの人断ればいいなと思っているが、期待に反して「それでは」とお話を始めたりする。次第に子供たちのざわめきが聞こえるようになり、元気のいい先生が注意する。それでもなかなか話をやめてくれない来賓もある。

やっと来賓祝辞が終わると「国歌斉唱」、四方拝には「年の初めのため」として・・・、紀元節には「雲に聳ゆる高千穂の・・・」、天皇節は「今日のよき日は大君の・・・」 明治節は「アジアの東日出ずるところ・・・」という具合。

式歌が終わって「開式の辞」待ちに待ったお祝品を貰う番だ。四方拝にはみかん七、八個。天皇節と明治節は紅白饅頭、紀元節は瓦煎餅というように、だいたい決まっていた。それを貰いながら外へ出て解散となる。途中で食べる人は殆ど無く家まで持って帰って親や弟達に分けて食べたものだ。これも懐かしい思い出である。（石井）



大子町の文学碑（続）

江田 七男

滝本に下りると、斉昭の歌碑。

もみち葉を風にまかせて山姫の

しみつをくくるふくろ田の瀧

この歌と合わせて、観瀑台の背壁には光圀の歌と大町桂月の歌をはめこんだ碑がある。

いつの世につゝみこめけん袋田の

布引出すしら糸の瀧

光 圀

御空より巖を伝ひて飛び落ちて

すべりて散りて四度の大瀧

桂 月

三六亭のわきに吉田高浪の句碑がある。

水瀑に雪こぼし雲行くのみぞ

これから一寸歩を進めると、大子地方の民謡草刈節と茶揉み唄が刻まれた碑が見える。大子町には、もう一基の民謡碑がある。野口雨情作詞、中山晋平作曲になる民謡である。水郡線の開通に伴ってできたものだ。この詩碑は、袋田からは遠いが「森林の温泉（もりのいでゆ）」の前庭に建てられている。

観瀑トンネルへの道には、今大子町で文化観光の目玉として好評を博している俳句ポスト建設のきっかけとなった「風の道」主宰松本澄江主筆の

後ずさりして秋瀑をほしいまま

の句碑が木陰にたたずむかのように建つ。

滝を後にして国道に向かう。袋田温泉ホテルの敷地に、桜田門外の変の主役といわれる関鉄之介の自筆歌碑が国道四六一号に面して建つ。

河鹿鳴く山川みづのうきふしに

あはれははるの夜半にもぞ知る

さらに国道一一八号割山の近く、北条館別館の庭に俳句界に有名な阿波野青畝の句碑がある。

陸奥の入口なれば納涼瀧

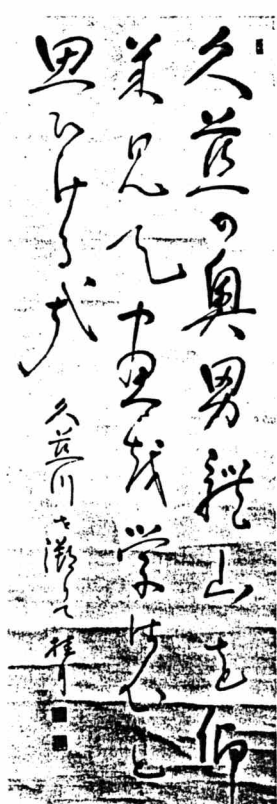
国道一一八号を水戸方面へ。西金駅近くから男体山麓古分屋敷弘法堂境内に大町桂月の

久慈の奥男体山を仰ぎ見て

画を学はむと思ひける哉

の歌の碑が、峯間鹿水（本名信吉）の筆による古いものと桂月真筆から写し取った新しいもの、各一基ずつある。

この他に私のメモにない漢詩碑が数基あるはず。これらについては、後の機会に譲りたい。



（歌碑の元になった桂月の真筆）

【史料紹介】昭和三十三年年度の「冷蔵庫購入」について

昭和三十年代に入ると、袋田の滝や男体山などの新緑や紅葉をもとめて、都会からの行楽客が激増する。大子温泉の開発が成功するのは昭和三十六年であるが、それより少し前、大子町旅館協同組合の冷蔵庫購入を紹介しよう。

茨城県立歴史館には昭和三十一年と三十六年「中小企業振興資金共同施設貸付決定関係綴」商工水産部水産課が所蔵されている。そこに大子町旅館協同組合の「中小企業振興資金貸付申請書」がある。

大子旅館協同組合は、昭和三十三年四月に結成された。その事業の概要は、組合員の取扱品の共同購買（鮮魚・青果物・衣料品・陶器・漆器・砂糖・醤油・薪炭など）、宿泊料の協定、組合員の事業に関する経営及び技術の改善向上を計る為の行事（旅館診断実施・サービスマニュアル・料理講習会・鬼怒川と川治温泉地の視察）、組合員のために共同宣伝（新聞広告・忘年会新年会宴会の案内・快速列車奥久慈号での茶やマッチやチラシの配付）など十項目がある。冷蔵庫購入の目的は、

1 現在東京買出し月十一回く十二回と成っており、冷蔵庫の設置により、月五回に減ずることができる

2 現在まで各旅館にて、注文を受けて買出ししており、各旅館にては随時客を見込んでいない。冷蔵庫設置により不時客分の利用出来る様になり、その利用増三割と見込むことができる

3 自動車東京行き半減により危険度も半減する

以上の点より見て、組合合理化のため冷蔵庫設置（鮮魚、青果等の保管）は不可欠の問題である。施設利用の予定人員は十人。

そこで、昭和三十三年十二月上旬に「冷蔵庫一式」を購入する予定なので、金額五万七千三百六十円のうち、その半額を県の貸付金を受けたいと、三十三年十一月付、茨城県知事友末洋治あて申請した。それに対して、昭和三十四年三月に、茨城県知事は、二十四万円の貸付金を認可した。

当時の温泉利用客数（入湯人員）は、昭和三十五年度が四万一千九百九十五人、四十五年度は一八万九千五百九十九人と増えてゆく。（野内）

【編集後記】

大子町は今、新緑から青葉へと移り変わる季節を迎えて、町全体が自然の榮養をたっぷり含んだ緑の衣裳に包まれております。山があることの恵みを痛感します。しかし、先頃公表された今年の「林業白書」によりますと、木材の自給率は史上最低の一九・六％にまで落ち込んだとか。林業経営が成り立たないため、手入れのされない荒れた森林が広がっています。大子も例外ではありません。知恵を出しあい、森林の再生に向けた取り組みが求められています。

さて、十号記念の節目を経てまた新たな気持ちで第一歩を踏み出した本号ですが、本紙編集人に異動のあったことをまずお知らせいたします。大子町史の編さん事務局員として、町史完結後は歴史資料室の責任者として、また時には執筆者としても活躍された井上和司さんが、この四月に税務課へ転出されました。もちろんこれで縁が切れるわけではなく、大子の歴史についての蘊蓄を傾けた原稿をこれまで以上にお寄せいただくことになっています。その井上さんに代わって赴任されたのが、吉成英文さん。かつて町史編さんに従事されたことがあり、郷土史家として多くの実績をあげておられる方です。編集に、執筆に、強い味方が一人増えたと思います。

私たち六名の編集人は、読者の皆様の応援を得ながらより充実した紙面の実現に今後とも力を尽くしたいと考えております。どうぞ御期待ください。（斎藤）

編集人

斎藤典生（茨城大学文学部）

野内正美（茨城県立歴史館）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 罔彦（大子町教育長）

吉成英文（大子町社会教育課）

井上和司（大子町税務課）

編集発行

遊 由 文 の 人

大子町立中央公民館歴史資料室 貸付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地

電話 三一九一三五五

電話 〇二九五七二二二六二七